

グローバルでローカル、芸術の町アシュランドに滞在して

大島 希巳江

2018年4月から在外研究の機会をいただき、アメリカはオレゴン州のアシュランドという小さな町に滞在している。オレゴン州最南端の町で、カリフォルニア州との州境までほんの20キロほどである。オレゴン州の主要都市よりカリフォルニアのほうがよく近い。シスキュー山脈、カスケード山脈などの山々に囲まれたログ渓谷に位置し、多くの国立公園に囲まれた自然にあふれた町である。このような釣りやキャンプとハイキングしかできない町に、なんの研究にきたのか、と思われるかもしれない。確かにアウトドア派である我が家のメンバーにはぴったりの町であるが、なんといってもアシュランドといえば国際的に評価の高いオレゴン・シェイクスピア・フェスティバルの開催地である。

長い伝統のあるこのフェスティバルでは、毎年2月から10月末まで毎日、町中にある数十か所の劇場で数多くの演劇やミュージカルが行われている。世界中から著名な俳優やミュージシャンが数百名やってきて1年間町に滞在し、その年のフェスティバルに出演す

る。私にとってこの町に住むことの醍醐味は、なんといってもこれらの俳優、音楽家、監督、デザイナーといったプロが舞台の合間に開いてくれるワークショップを受講できることである。今回の在外研究のテーマ、インプロビゼーション（即興劇）のワークショップも数多く受けることができた。即興力のトレーニングがいかにコミュニケーション力と言語運用能力を向上させることにつな



オレゴン州アシュランド（町）

がるか、という研究が私の主なテーマであるが、演劇指導を長く続けてきた即興のプロフェッショナルたちが同様のテーマで一般向けにワークショップを行っていることは大変に興味深かった。長期にわたってディスカッションを重ねる機会に恵まれ、大変に有意義な時間を過ごしている。

オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルという名で知られてはいるが、実はシェイクスピアばかりを演出しているわけではない。アメリカの現代演劇もあるし、日本の時代劇もある。私も英語落語を披露する機会に何度か恵まれた。このような演劇・芸術の町であるからダウンタウンの雰囲気もちょっと変わっている。自由でアーティストックな服装、髪型、思想の人々が多い。ハロウィーンのパレードなどは、プロの衣装デザイナーやメイクアーティストが本気で参加するので、太刀打ちできないほどのド迫力。子供たちは容赦なく泣かされるはめになる。

多民族社会アメリカであるはずだが、この町は92%ほどがいわゆる白人ヨーロッパ系であり、3%がヒスパニック系、2%がアジア系、その他の中

にアフリカン・アメリカンやネイティブ・アメリカンがそれぞれ1%に満たない割合である。観光客と舞台関係者が多いので、多種多様な人々が混在している雰囲気はあるが、地元に住む人々はそうでもない。子供たちの通う小学校では、我が家の二人が唯一のアジア系である。地元の郵便局では東京に荷物を送ろうとしたとき、「日本に東京という名の都市はない。中国の間違ひではないか」と係りのおっちゃんに真顔で言われ、ひっくり返りそうになった。さんざん議論した挙句、やっとパソコン上でTokyo in Japanを見つけて納得してもらい無事に発送することができた。なぜ東京の位置について日本人の私に挑みかかるのか、わけがわからない。それくらい、アジアにはなじみのない人々の町である。

それも悪いことばかりではない。リベラルなりゾート地であるために、日本食は人気があり高級日本食レストランも多い。しかし、日本を知らない人がほとんどなので日本食のクオリティが低い。小さくてべちゃっとした味気のない餃子が5つで12ドル、乾いたサーモンとアボガドの海苔

巻きが一本18ドル、主婦感覚満載の私の財布は当然貝のように閉じてしまうが、これがこの町では当たり前。そのため、私が作ってふるまう餃子やのり巻きは大学でも近所でも絶大な人気である。普通に簡単な日本食作るだけでこんなに喜ばれるとは。楽勝。

そんな観光地アシュランドの主な収入源はなんといってもこのフェスティバルを目当てにやってくる観光収入で、シーズン中は町の人口以上の観光客であふれかえっている。市内にあ



森の中にたたずむ南オレゴン州立大学の図書館

る南オレゴン州立大学とアシュランド高校のいくつかの劇場でも学生たちがミュージカルを披露するが、学生とはいえアメリカ全土からやってくるセミプロのような学生ばかりで、入場チケットもしっかり100ドル近くするのである。確かにその価値があるだけのレベルの高さである。おそるべき演劇の町、アシュランド。



キャンパス、街中、我が家の庭まで出没する野生の鹿

南オレゴン州立大学でも Theater 専攻の学生に落語のスキ

ルを教える授業を依頼され担当しているが、日本の文化や歴史については彼らは何も知らないので楽勝である。何をレクチャーしても、ほほ一、と感心して喜んでくれる。しかし、落語についてはちょっと演じていくつかのスキルとその背景を説明すると、あっという間にできてしまう。セリフやジェスチャーのアレンジも上手い。声の質も抜群、話し方や惹きつける力、間のとりかたも絶妙である。普段からチケット代をとって舞台に立っている学生たちであるから、レベルが高い。これはまずい、すぐに追いつかれて追い越されてしまう。ちょっとペースを落として教えなければ。まずはちゃんと正座できない人から厳しく指導し直そう。とこっそり考えている。

在外研究のテーマとは別に、私の専門分野である異文化コミュニケーションと社会言語学という観点からも無視できない出来事が満載の毎日である。たとえば、家の中で靴を脱ぐという習慣の家庭が圧倒的に増えたという印象がある。ご近所、子供たちの友人宅、同僚などのお家に招かれてお邪魔したが、25軒中21軒は家では靴を脱いでくださいね、という習慣であった。20年以上前、学生の頃にアメリカのコロラド州に住んでいたが家の中で靴を脱ぐなんて、あり得なかったもので

ある。ベッドルームに入ってはじめて靴は脱いだものだったが…。それにともなって家の造りも変わってきているようである。要するにフロントドア付近に、靴を収納する必要性が出てきて、それができない家はガレージの中にシュークロゼットを造り付け、結果的にガレージがメインの出入り口に代わっているという変化が見られる。文化的習慣の変化が物理的文化を変化させている一つの例である。

また、この地域特有なのかどうかかわからないが、ランチをきちんと食べるという習慣がない。これに慣れるのには時間がかかった。午前11時から午後1時までの集まりでもクラッカーとチーズが並んでいるだけだったり、1時半に集合して2時にサンドイッチとカップケーキが出たりする。5時に集まればもうワインとビールとBBQ。要するに、午前中の後半から夕方あたりまで、少しづつだらだらとずっと食べ続ける、という感じである。小学校でも子供たちはランチというより、スナック（リンゴやブドウ、ナッツ類、クラッカー、ソーセージの薄切り、チーズ、などをそれぞれ小袋に入れてくる）をたくさん持ってきて休み時間や授業の合間にちょこちょこ食べている。朝昼晩、とがつつり三食食べるという体育会系の我が家はこ

れに慣れるのに苦労した。結局、常に何か食べ物を持ち歩くという習慣に現在は落ち着いている。

そのような習慣のせいか、こちらの学校は昼休みがとても短い。ある意味これは合理的である。昼休みを20分にして、ちょこちょこ食べを習慣とすれば、100分授業も問題ではないかもしれない。

英語に関しては、移民が少ないのであまり特徴のないアメリカ西海岸の標準英語を使っているという印象である。しかし、やはり若者は日本同様に勝手に流行言葉を作っては勝手に使い、大人たちに嫌な顔をされている。11歳の長男は“horrarious”という言葉で友人との間で数か月前から使い始めた。Horribleとhilariousをくっつけた造語で、ひどくて面白いことを意味するらしい。階段を踏み外して5段ほど転げ落ちたとき、いたずらして先生に怒られたとき、など痛々しくて嫌な思いをしつつも笑えるような時にThat was horrarious!を使う。いかにも少年らしい造語である。どうも多くの子供たちが使っているようである。また、大人には異様に聞こえる“my one”も最近は多くの子供たちが使っている。Hey, that's not your card,

it's my one!のように使うのであるが、ご存じのように本来mineであるところに使っている。不思議な変化である。特に都合がよいとも思えず、理由はわからない。大学生から20代前半の女子はやたらめったら“Perfect!”(しかもperfectのところを強調して伸ばしつつ語尾をぐいっと上げる発音)を使う。頻度が高いことと発音の特徴も併せて、中年以降の我々にはちょーっと耳障り…。「これカードで支払いたいのだけ

ど”“Perfect!”「5時に部屋を予約できる?」“Yes, perfect!”「具合が悪いので明日はお休みしたいのですが」“OK, that's perfect!”なんでもかんでもパーフェクトはおかしいでしょ…。いまは中年の我々も20代のころはめちゃくちゃな若者言葉を作っては使っていたわけだから責める気はない。日本語でもそうだが、流行の言い方や若者言葉、新語は作られても定着するものと、すぐに消滅するものがある。これらの言葉が今後どうなっていくのか、興味深い。すぐに消滅するかもしれないこれらの言葉をここに記録しておきたいと思う。

このような日々の細かい事情に気が付いたり気を配ったりする余裕があり、多くの貴重なワークショップや授業を受講したり、時間をかけてディスカッションをしたり、図書館にこもったり…、やってみたいと思っていたことが実現できているのも、すべて先生方と職員のみなさまのご理解をいただき在外研究をさせていただいているおかげである。この場を借りて心より御礼を申し上げたい。



ニジマスが釣れる近所の湖